



第24回日本自費出版文化賞の冊子『第24回日本自費出版文化賞誌上表彰式』と『自費出版年鑑2021』が完成し、今月初めから会員の皆様に送付されます。その冊子の中で鎌田慧選考委員長は以下のようなメッセージを記しています。そろそろお手元に届きますが、自費出版事業者や関係者の方に何回も読んでいただきたく転載いたします。

自費出版文化賞の選考委員を務めることによって、わたしは「地の塩」というか、「豊かな地下水」というべきか、この日本列島に日常では視えない膨大な文化が存在しているのを、実際に感じる事ができました。

ものを書くという作業には、プロもアマチュアありません。それぞれの内的な必然性に従って書くのです。プロは作品の発表の場をもてる人のことでもあり、アマチュアはその場に恵まれていないだけのちがいともいえます。

作品を活字にするチャンスをもてないひとたちは、いわば「自助努力」によるしかありません。活字化された作品がようやく地表に顔をだして、光を与えられる。それを思いますと選考委員の緊張は、ほかの賞以上のものがあります。たとえば文学賞などは応募のチャンスはいくつか、何回かありますが、自費出版の場合は、それまでの長い時間と生活がかかっていることが多いようです。いつも最後まで大賞候補として残った作品はしのぎを削っていて、どちらにしても選考委員の見識が問われます。

地域に暮らすひとびとの貴重な生活の記録は、戦争や災害ばかりか地域の祭り、文化もふくめて、丸ごと地域史としてまとめられているものがあります。「自分史」はこの賞の創設者の色川大吉さんの命名ですが、ちいさな歴史の流れが大きな歴史を形成している、という史観が、市民の側から歴史の記録を顕彰するこの賞を貫いている、と思います。色川さんはご自分でも自費出版されて応募されました。身をもって範を示めされ、お亡くなりになられました。（鎌田 慧）

□□ \_\_\_\_\_ □□

2. お知らせ …第36回自費出版アドバイザー講座  
「自費出版を電子出版する方法」に36人が参加

□□ \_\_\_\_\_ □□

11月17日に開催された第36回自費出版アドバイザー講座「自費出版を電子出版する方法」に36人が参加しました。北は旭川、南は香川からの参加でした。

講師の長谷川氏は、欧米では環境配慮のため電子出版とオンデマンド出版が進んでいるとし、皆さんにも紙と電子のハイブリット出版の流れをつかんで欲しいと話してくれました。もし電子出版に不安があるなら、電子書籍の制作・発行・販売委託サービスをしている業者に任せてしまえばいいと、代表的な業者まで紹介してくれました（添付参照）。さらに図のように日本自費出版ネットワークが仲介することも一案だと勧めてくれました。

□□ \_\_\_\_\_ □□

4. 自費出版事情 … ～会員便り～ No.48

□□ \_\_\_\_\_ □□

「困っていること、ふたつ」

交友プランニングセンター センター長 横井司

長年自費出版アドバイザーの肩書で自費出版の仕事に携わっていると、時折困難

な問題に出くわす。事実現在も困っていることがふたつある。

一つは個人情報の問題である。自叙伝では固有名詞が出る。自分のことはさておき、知人や団体を誹謗中傷する場面である。自叙伝だから自由と言えそうだが、世間的に名の通っている相手なら一歩間違えば保障問題にもなる。あれこれとカモフラージュする表現を提案する。

もう一つはホームページの写真の流用である。著作権の問題が絡むだけに難しい。お客様のオリジナルの写真やホームページの日本人の写真なら何とか問題が解決できそうだが、外国人の写真流用については特に慎重を要する。著作権、肖像権といった問題が複雑に絡み合う。クリエイティブ・コモンズ・ライセンスというのをネットで見つけたが、なかなかすんなりと理解し難い。

以上、最近困っていること、ふたつである。

□□ \_\_\_\_\_ □□

☆ 知つとこ 岐阜 ☆ (再)その7

□□ \_\_\_\_\_ □□

知つとこ岐阜 その7

川端康成『篝火』『非常』『南方の火』その1

前回、岐阜が舞台の映画や小説についてお話しましたが、今回から数回に分けて私がお勧めする「これを読むと岐阜を訪れたい小説」をご紹介します。

まず最初は、川端康成の『篝火』『非常』『南方の火』です。これは別々の時期に発表された3つの短編ですが、川端文学を知るうえでとても大切な作品となっています。川端若き日の恋と失恋を描いた私小説です。しかし残念なことに「篝火」以外の2つの短編は「川端康成全集」（新潮社）でしか目にすることができません。

川端がまだ学生の頃、結婚の約束までした女性がいたことをご存知でしょうか。しかし、その恋は悲しい終わりを迎えてしまいます。川端の初期の作品にはこの時の出来事がかなり詳しく書かれています。それほどまでにこの失恋は若い川端の心を突き刺し、その後の川端作品に大きな影響を及ぼしました。一説には『伊豆の踊子』の踊り子には、この女性の面影が重ねられているともいわれています。

大まかなあらすじ（小説の中では個人名は変えてあります）  
大正8年（1919）、第一高等学校の学生であった20歳の川端は、友人と出掛けたカフェで、女給をしていた7歳年下の伊藤初代と知り合い、まだ幼さの残る初代に恋心を抱きます。その後、初代は縁あって岐阜の西方寺というお寺の養女になるため東京を離れてしまいます。川端は初代に逢いに2度岐阜を訪れ、自分の気持ちを打ち明けるとともに結婚の意思を伝え、初代もそれを承諾します。川端22歳、初代15歳のことでした。東京に戻り、初代を迎える準備を進める川端のもとに、『非常』と書かれた手紙が届きます。そこには、「私はあなた様と固くお約束をしましたが、私にはある非常があるのです。」「その非常を話すくらいなら、私は死んだ方がどんなに幸福でしょう。」「どうか私のような者はこの世にいなかったとおぼしめして下さいませ。」という、初代からの一方的な別れの手紙を受け取ります。不安な気持ちをかかえながらも川端は、取るものも取りあえず東京から岐阜に

駆け付けたのです。

小説の中には実際の岐阜の街並が多く描写されています。  
次回は川端の目線を通し、初代と過ごした岐阜の風景を書いていきたいと思ひます。

株式会社 岐阜文芸社 飯尾みゆき

\*\*\*\*\*

★あしがき

鎌田慧選考委員長の言葉の重みを感じます。選考委員の方には心より感謝いたします。  
交友プランニングセンターの横井さまのお困りごと、自費出版にはつきものですが、  
会員の皆さまで、何か良い解決方法があれば教えてくださいね。

まだ冬のコートは出していませんが、北海道からはすでに大雪の便り・・・  
今年の冬はどんな冬になるのでしょうか？  
皆さま、少し早いですが、お身体ご自愛いただき、どうぞよいお年をお迎えくださいませ。

最後までお読みくださりありがとうございました。

---

お気づきの点、掲載情報、はたまた私への激励のお言葉がございましたら  
yumi@maruwanet.co.jp まで、お願いいたします。

\*\*\*\*\*

◆日本自費出版ネットワーク事務局  
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町7-16 ニッケイビル7階  
電話：03-5623-5411  
FAX：03-5623-5473

<http://www.jsjapan.net/>

\*\*\*\*\*